幽子・愛

司修

幽子・愛

司修

講談社

幽子・愛

一九九〇年八月三〇日　第一刷発行

著者——司　修

© Osamu Tsukasa 1990, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一二一　電話東京〇三(九四五)一一一一(大代表)

印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——黒柳製本株式会社

定価——一四〇〇円(本体一三五九円)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-205034-X(文1)

幽子・愛

裝幀　著者自裝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

I

幽子と良の乗った、木製の古びたボートが、汚れたシャツを着た十二、三の少年によってガンジス河に押出されると、供物の黄色い花びらが吹き溜まりに集まって、油の被膜と一緒に拡がり、沐浴する人々に近づいていった。

早朝の気温は低く、スェーターの上にウインドヤッケを羽織っている良は、それでもまだ肌寒い。インドでも、一月の朝は冷えこんだ。

巡礼の人々は唇を紫にして河に入り、まだ見えぬ太陽に向かって祈った。彼らの姿は、辺りの景色を神秘的に変えた。

幽子はカメラを構えて舟から乗りだし、ガンジスの鉛色の水を撮っていた。朝靄を映した水は、巨大な魚の腹を思わせる、ぬめっとした塊となって渦巻き、色を変えた。

それから、彼らの乗ったボートは、停泊している幽霊船のようなハウスボートの間を抜けて、波一つない水面を滑り、ベナレスの、沐浴場の全貌が望める場所に出た。

靄に消されて見えないと思っていた西岸の建造物は、暗がりでも輝く黄金の障屏画となって、夢幻なる光を放っていた。

アラジンが走り出てきそうな、アラビア風の家や、小さな塔が幾つも幾つも積み重なった、シカラという屋根を持つヒンドゥー寺院などが、樹木の茂りを飾りにして、びっしりと並んでいた。貴族や豪商が競って建てた別荘であるだけに、華麗な趣(おもむき)がある。

船頭の少年は、靄の中に歌声を聞くと、艪をボートに上げて口笛を高く鳴らした。すると、対岸からやってきたらしい舟からも口笛が返ってきた。突如、靄を破って人影が現われた。

夢が行う悪戯(いたずら)のようだ。巡礼たちが祈りの言葉を高らかに上げたので、良は肝(きも)を潰(つぶ)すほど驚いた。隙間(すきま)もなく三十人ほども乗せた人の重みで、巡礼たちのボートは沈みそうになっていた。巡礼たちは、一様に、幽子たちを蔑(さげす)むように睨(にら)んで過ぎた。祈りの声は、歓喜を表わしているのに、表情は陰鬱(いんうつ)だった。巡礼たちのボートが過ぎると、風もないのに、靄がさっと引いた。

「幽子ちゃん、どう、写真になりそうかい」

良はスケッチブックから目を離し、浮かぬ顔の幽子に声をかけた。

幽子は薄靄の中に昇り始めた赤い太陽を見ていた。目を細めてみたり、両手で双眼鏡のような形を作って覗(のぞ)いたりした。

「ね、ね、リョウさん、ボートを漕いでいるその子と同じぐらいの少年がね、水の上を歩いているのよ」

彼女は望遠レンズの付いたカメラを構え、シャッターを続けさまに切った。良はそれには答えず、沐浴場のスケッチに、彩色用の色鉛筆を走らせていた。

「うそじゃないのよ。ジャンクのような船と小さなボートが見えるでしょ、その左隣り、太陽が水に映って揺れているところ。水の上を歩ける人がいるんだわ」

幽子は良の肩に手をかけて揺すった。彼は下を向いたまま、首だけを幽子に向け、右肩に頬を

のせた。
彼には水の上を歩く少年など見えなかった。スケッチブックに目を移し、黙ったまま東岸を見ていた。東岸は再び靄に包まれ、光が拡散されるためか、陰さえもなかった。不思議なことに、太陽は靄で見えないのに、ガンジスの水面には丸い形をした強い光が千切れたり、くっついたりして、軟体動物のように動き、エロティックに戯れていた。彼は水の上を歩く人より、よほど興味深かった。

ベナレスに着いた翌日、幽子は、宿を出て行く二人づれの、ヒッピー風なアメリカ人に付いて行ったまま、二日も帰らなかった。良の心には、まだそのときの腹立ちが残っていて、彼女との会話に入っていけなかった。
あのとき良は、ベナレスの宿についてすぐ、ガンジス河を見下ろす屋上に出て、夕闇に消されかかった、幽幻な流れをスケッチしていた。消された遠くの景色から、人の声がとぎれとぎれにやってきて、風の悪戯が感じられた。
カランカランと空缶の転がる音がして、子供の歓声が建物の真下から聞こえてきた。輪になって遊んでいるらしい雰囲気は伝わるが、姿は見えない。
良は、静かに落ち着いた気分が続いて、瞑想に入る僧の気持とはこんなものかと思った。
ゆっくりと、ゆっくりと、すべてが消えていき、媚薬によって重くなった瞼が閉じていくようだ。何も見えなくなることが、良には満たされていく思いに変わった。
屋上から部屋に戻るには、数人がざこ寝するドミトリーの部屋を通らなければならなかった。四人の日本人男性と、三人のフランス人らしき女性が、思い思いの方角を向いて食事をしてい

た。彼らは、良が屋上へ行くときも「やあ」といったが、帰りにも「やあ」といった。金髪の女も「やあ」といったので、良は微笑み、「やあ」といって過ぎた。

部屋の隅の階段を降りていくと、ドアのついた部屋が二つ見えた。その下は風呂場と洗濯場である。一階のロビーの横の小さな板の間が、彼らの泊まるところだった。

幽子は食事をすませて、宿のマダムに貸してもらった寝袋に体を半分入れ、日記を書いていた。声をかけても彼女は黙って彼を見、手帳に目を移した。

良はリュックからラム酒を出し、瓶に口を付けて胃に流し込んだ。すると、さっき呑んだガンジスの暗闇が、熱くなって喉を這い上がってきた。

（この安らぎはどこからやってくるのだろう）良は、自分でも信じられない心の安まりを感じ、インドへ来てよかったと思う。

どどどと、石の階段が響いた。二人の若いアメリカ人だった。飛行機で隣り合わせたヒッピーたちだ。飛行機では三人一緒だったから、もう一人いるはずである。女性かと思える表情の男が、喉を押さえ、ゼーゼーと荒い息をして苦しがっていた。

宿の亭主が奥の部屋から出てくると、熱が高く水のような下痢をしている、医者を呼んでくれと、ブロンドの男が訴えた。亭主は、ここはアメリカと違って夜に医者は呼べない、少し遠いが行くならここだと地図を書いて男に与えた。ブロンドの男はなんとか呼んでくれと口説いたが、亭主は受け付けなかった。

「私がついてってあげるわ」

幽子が甲高い声を上げた。彼女は寝袋から出ると、若い男に近付いて腕をささえ、亭主とヒンディ語でなにやら交わし、良が止めといたほうがいいというのも聞かずに、彼らと外に出ていっ

た。その晩は帰らず、翌々日になって戻ってきた。幽子がいない間、良は捜すこともならず、絵を描くことも出来ず、宿の板の間にごろごろして帰るのを待っていた。心配と不安は増し、疲れて眠ると、幽子が事故に遭う夢ばかり見た。

ヒンディ語が話せるので、通訳として来てもらっている関係からすれば、彼女がなにをしようと勝手なのである。だが、一週間以上も二人だけで旅をしていると、お互いにわがままが出て、つまらぬことから口喧嘩するようになっていた。子供だとばかり思っていた友人の一人娘だが、女と男という関係は簡単な喧嘩を繰り返すたびに姿を現わした。

一人で戻ってきた幽子を見て、良は、極度の疲労に襲われた。どんな顔に映ったのか、「妬いてるの？」と幽子はいった。

思い出せば、デーリーに着いた晩あたりから、幽子の態度が気になっていた。

成田空港を発ってから五日目のことだった。デーリーのホテルで眠りについた良を起こして、ネックレスのねじが壊れてしまったから外してくれと幽子がいった。ねじは確かに壊れていたが、頭を潜らせれば取れるものである。それなのに胸の膨らみの間で良はねじを修理させられた。そうやっているあいだ幽子は目をとじて、彼がどうしようと勝手だという態度を示していた。彼は、幽子の父、田中幸一郎の顔が、幽子の胸の谷に見えて、ねじをはずす以外に何もできなかった。彼女はそれが不満で、アメリカ人と出ていったのだろう。

「ねえ、あの帆掛船の横よ。行ってもらおうかしら。まるでガラスの上を歩いているみたいだわ。水の上を歩くなんて信じられない。リョウさん見てよ、奇跡が起こっているんだわ」

幽子は、デーリーのバザールで買ったブルーのショールを体に巻きつけ、白い息を煙草の煙の

ように吐いた。幽子の少し厚ぼったい唇が、カメラを持った左手の中指に触れている。彼女が写真を撮るときの癖である。前髪を長く垂らし、眉の下できっちりと切り揃えている。美人ではないがあどけないところがある。そのあどけなさを隠すためか、面のように厚く化粧していた。そんなことをしなければ、美しく見えるのに、と良は思う。彼女の着ているものはすべて黒である。砂嵐を防ぐために仕方なく買ったブルーのショールは、ガンジスに流すといって持ってきていた。

幽子の父の田中は、秋田の山奥の寺で、住職をしながら絵を描いていた。良とは、五年前まで同じ団体で絵を発表していた仲間である。良は団体を離れてフリーになったが、田中はまだ団体に属していて、年に一度の展覧会が始まると、上京して良と会っている。良が寺の生まれであることも、田中との交友が続いている理由のようだ。

良は高田のS寺で生まれ、小学生である間、芝の増上寺に預けられ、再び高田に戻って中学に入っていた。複雑な家庭の事情について、良は誰にも明かしていない。母の顔は見ていない。父も、いないことになっているが、おおよそ見当はついていた。そのようなことが影響して、寺の生まれというのがいやでたまらなかったのに、年と共に、子供の頃の、寺の暮らしが懐かしく、仏教に関心を持つようにもなり、絵も密教美術の様式を取り入れていた。

M美大に籍を置いていた幽子は、田中と一緒に新宿を飲み歩くときにいつもくっついてきた。良の後輩でもある。仏教関係の大学を終えてからM美大へ入った幽子は、卒業するとすぐに、彼女は、男性のサディスティックなヌード写真を撮って、週刊誌で騒がれた。以来、彼女は写真家である。

「あの子、水の上でなにか拾ったわよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

幽子はファインダーから目を離してカメラを良に手渡し、水の上を歩く少年を見るように催促した。良が、色を塗り終わるまで待ってくれというと、彼女は首を強く振って長い髪を宙に散らし、再び対岸に体を向けた。

荼毘にふしている沐浴場にボートは近づいていた。火葬場として有名なマニカルニカガートである。沐浴に降りるための階段の下に、薪を積んだ船が着いたところであった。階段の右手に煙が上がっていた。大きなザルを頭にのせた男が調子をつけて踊り出ると、階段を左に移動して、人の灰らしきものを河に投げ込んだ。水面には黄色い花が浮かび、ガンジスはどんよりと流れている。良は、花びらの下に大きな桃のようなものを見つけた。陶器のようでもある。変に気になるので見続けていたが、嬰児の尻なのだ。モミジのような手を尻の近くに見付けて、良は底気味が悪くなった。嬰児は羊水の中で浮いているように水面下を流れていった。彼は幽子を気遣って死骸が隠れる位置に体を移した。彼女は水の上を歩いているという少年をレンズで追い続けていた。

竹で作ったタンカのようなものに、縄で縛られて乗せられた小さな屍体が、四人の男に担がれて階段を降りてきた。薄い布にくるまったそれは、合わされた足や、顔の線をくっきりと見せて美しく、また痛ましかった。

「赤いサリーだから女の屍体だな」

彼はさきほどからの動揺を隠しきれず、震え声を出した。幽子は黙っていた。

艪を漕いでいた少年が、たどたどしい英語でその様子を説明した。

「三歳以下の子供は、石の重りを付けて、ガンジスの中央に沈めるんだよ。レプラやコレラで死んだ者も同じさ」

船頭の少年の声で振り返った幽子が、死者にカメラを向けると、
「だめだ」
と少年はきつくいった。続けてすぐに良のスケッチブックを指差して、それもだめだというふうに首を横に振り、険しい表情をつくった。
「無から生まれた人間が、無に還っていく。その神聖な儀式の写真が残されたら、あの娘は無に還ることができない」
少年はそういい足して、栗色の肌に日を受けて光った目を、キラキラ輝く水の上にやった。彼はその水を掌にすくって口に入れ、ガラガラと、気持よさそうにうがいをした。
少女の屍体がガンジスの水に浸されて出されると、黄色い、菊のような花を体の周りに散らし、新しいサリーを数枚重ねて掛けた。まるで芝居が行われているかのように儀式は進行した。
重ねた薪に火が点けられ、すでに燃えているように見える、赤と黄の模様のサリーに包まれた屍体が、炎の上に置かれた。
「これも、死という絶望感から救われるための儀式なんだろうね」
良は自分のいった言葉が消えぬうちに、恐怖からは逃れられないだろうと思った。
姉兄の死、親しかった人たちの死に立ち会った時の状況が、一瞬の間に浮かんだ。死は年とともに重みを感じさせられ、自分の生を問われるようになっていた。軽々しく見えてくる自分の生に、押し倒されそうになりながら、ようやく姿勢を元に戻すと、死んだ友人たちの病気に自分も冒されていて、もうすぐあの苦しみに甘んじなければならないのかと恐れた。そうした自分の弱さを他者に見られまいとするいじけた心が、普段でも、必要以上の笑いとなって彼の顔に現われた。

（逃げている）という思いが、いつも良にのしかかっていた。
「火葬料なんか取るのかい」
良は船頭の少年に訊いた。
「貧乏人はただみたいなものさ。あんただったら千ルピーはとるだろうよ」
船頭は生意気な口を利いた。千ルピーといえば日本円で一万円ほどである。
「人間は死んだあとでも金を使うんだなあ」
船頭は答えなかった。
「ねえ、人間が水の上を歩いて来るのよ。聞こえないの」
幽子は、今度こそ信じてもらうぞという意気込みでいうと、船頭の少年にヒンディ語でなにやらいい、ボートを東岸に向けさせた。
「インドでは必ずなにかに出会えると思っていたわ。こんなに早くとは思わなかったけど。リョウさん見て」
幽子は、カメラを良に渡した。
彼は持ち重りのするカメラを胸で押さえ、望遠レンズの付いたファインダーに目を当てた。
太陽は再び靄に隠され、灰色に見える視界に、対岸の砂地がやや濃い灰色となって迫り、大型のボートが七艘、岸辺の人を乗せていた。良は、カメラを水平線に沿って移動させたが、幽子のいう、水の上を歩く少年は見つからなかった。
「寂しそうな表情をしているね、あの少年」
彼は、間近に映った、小舟に乗る少年の表情をとらえていった。その舟に、白い粉を体に塗り、一糸纏わぬ姿で立つ行者が乗っていた。どこかへ行く途中なのか、また、水上において天空

を睨み続けることが彼の修行なのか分からない。水の上を歩けるとしたらおそらくその男だろう、と彼は思った。

男の、のび放題の髪の毛は、デーリーの町角で見た少女の髪と同じだった。埃と脂で逆立ったそれは、パンツ一枚きり身に着けていない裸の少女を、鬼の子か、そうでなければ、神の使者かと思わせた。背に太陽を受けた少女は、頭から足の先まで、路面の土の色に見え、嵐の中で耐えて立っている彫像のようなのだった。「指先から光が出ているよ」と幽子がいった。たとえそれが、少女の背後にある太陽の悪戯にしても、良は幽子の言葉を信じた。

「寂しそうなんかじゃないよ。自慢してないだけよ。神通力？　念力かしら。わたしたちとすれ違うとき、あの子きっと顔をそむけると思うよ。挨拶なんかしたら沈んでしまうからね」

幽子の声ははずんでいた。

民宿を出て、彼らは古い建物の観光ホテルに二部屋とった。ざらついた二人の間の、空気を静めようと思う良の考えからだった。幽子は良のいらいらを楽しんでいた。少なくとも困ってはいなかった。幽子は、良の部屋にやってきてベッドに寝そべり、ラム酒の瓶を口にくわえて飲んだ。

「リョウさん、あなたは見たくなかったのね、あの子……。

臆病者、見なくちゃ駄目よ。見えているものばかり見ていては実在するものまで見失っちまうわ。輪郭線ばかり引いているようなものよ」

幽子はおどけるような口調でいった。
良は、椅子をイーゼル代わりにして、スケッチブックを置き、ニュートン製の水彩絵具で彩色していた。
「幽子ちゃん。あまり飲んだらいけないよ」
「やめてよ、壊さないでよ。どこまで避ければ満足するのよ。リョウさん、成田でいったこと覚えていて。タルコフスキーの映画で、自分一人の美などもういらない、という台詞が気にいったって。あなたのしていることは自分一人のための美を追求していることではないの」
彼女はふふふと笑った。良は幽子の挑発をかわした。
「俺にもラムをくれよ」
「ラムより答えなさい」
「もっと旅行を楽しもうじゃないか」
「リョウさんは見たくなかったのね。水の上を歩く少年の姿を現実のものにしたくなかったんでしょ」
「とんでもない。したいのはやまやまだよ。君よりもっと望んでいるよ。近くにやってこないだけさ、俺の感覚が鈍いんだろう」
「近寄らないからよ、あなたの物語は途中で休んでしまってる。あなたのいっている美にはほど遠いわ。それでもいいの」
「なにが」
「分かっているくせに」
良は、幽子に「あなた」と言われて、奇妙に胸騒ぎした。しばらく聞いたことがない言葉であ

る。
女房とは別居同然の生活が八、九年続いている。L字型に建つアパートの端と端に部屋を借りての生活で、一人暮らしが板についていた。息子二人と女房にはめったに顔を合わすこともない。女房も、お針仕事を辞めて保険の勧誘員になり、けっこう稼いでいた。上の息子が働くようにもなったので、良は勤めていた骨董屋をやめ、自分の家賃と食費ぐらいを、ディスプレイ・デザインをやったり、レストランの看板を、ロシアイコンのように描いて稼ぎ、後は絵だけを描き始めた。
「もしかすると俺は幽子ちゃんが好きなんかもしれないな」
良は、幽子の長い髪を見ていた。
「ラムをあげるわ」
幽子は煙草を出して良に勧めた。良は断った。幽子は深々と煙を吸った。
「デーリーで見たあの娘、あれはほんとに指先から光を作り出していたね」
「ストレートでいいの」
「俺は満州の焼け落ちた町々で、あのような子供たちをいっぱい見たよ。魂を抜かれてしまったように、目は空を見ていたが、こどもたちはみんな指先から光を出していたなあ」
「トイレの水しかないよ。おなか壊しても知らないよ」
「ああ、いいよ。幽子ちゃんに介抱してもらうのも悪くないからな」
「知らないよ。死んでからならめんどうみてやってもいいよ。灰はガンジスに流してあげようね」
「インドで死んだらな、頼むよ。死んだら死んだところの土に戻っていくのが一番よさそうだか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.